

『告白』(シニアver)

5/11
Tc586

男「好きです！付き合ってください！」

女「・・・はい？」

男「ずっと前から好きでした！付き合ってください！」

女「はい？」

男「あなたの事が好きです！お願いします！」

女「いや、ここ私の家ですよ。」

男「はい！」

女「誰ですかああ、あなた！え、なんで私の家にいるんですか！？」

どこから入ったんですか！？」

男「え、その扉から・・・」

女「いや、そういうことじゃなくて。確かに部屋の扉は一つしかないけど！」

男「あなたの 娘さんに「お母さんに告白しに来ました！」っていったら、

入れてくれました！」

女「ちよつ、何してんの！仮にも私の家だぞ、^よ知らん男を入れちゃダメだつて。」

男「それで返事は？」

女「へ？返事？・・・急に入ってきた人の告白なんてオーケーするはずな・・・」

男「いや、やっぱりいいです。返事は後でいいんで。」

女「よくない、よくない、私は良くない。すぐに返事出せるんで。昼寝して目覚めたら

突然いた知らない人の告白を了承する人はいないです。」

男「僕があなたを好きになつたのは・・・」

女「え？話聞いてます？」

男「ある雨の日の事でした・・・」

女「話続けないでもらえますか？聞いてないんで、知らないんで、付き合わないんで！」

男「その日、僕は傘を忘れてずぶ濡れになりながら、家への帰り道を急いでいました。

その時です、一人の女性が現れたのは。

その女性は僕に、「良ければどうぞ」って小さな折り畳みの傘を渡してくれたんです。そうそれがあなたとの出会い。それが、僕があなたに一目ぼれをした瞬間です。」

女「……。」

男「優しいあなたの笑みに、僕の心は奪われてしまいました。」

女「……それ、私じゃないですね。」

男「あ、そうだ。これ返そうと思って持ってきたんです。」

女「聞いてます？それ、私じゃないです。」

男「傘、ありがとうございます。」

女「わざとですか？わざと聞いてないんですか？コレ、私の傘じゃないんで。」

私、折りたたみ傘は小さくて濡れるから嫌いなんです。むしろ使わない派なんです。

何ならお父さんの傘、借りパクしてるくらいなんで。」

男「お名前、明日香さんっていうんですね。傘に書いてありました。」

かわいいお名前ですね。」

女「私、名前、典子です。持ち主違う人なんで、その人に返してあげてください。」

男「この傘が、あなたと僕をつないでくれた。これは運命です。」

女「ああ、運命なのかもしれないですね。私じゃないですけど。」

とにかく、私明日香さんじゃないんで。あなたの運命の人はたぶん近所にいると
思っんで、早めにそっちにいつてもうえますか？」

男「長居してすみません。今日はここで失礼しますね。返事待ってますから。」

女「だから、違いますから。私じゃないですから。」

男「それじゃあ、また来ます。」

女「来ないでください。絶対私じゃないんで。ちょっと聞いてます？ねえ、私じゃないんで！
ねえ！……帰っちゃったよ。」